

私の話はこういう具合に始まる。昔々、男と女がいた。彼らは一緒に生活して、子供がひとり生まれた。それは女の子だった。彼らはもうひとり子供を作ろうとしたが、この娘の他には子供を持つことは出来なかった。彼らは、[子供を得るために]何でもしたが、他の子供を持てなかった。その子供を彼らは育てた。

そのスルタンは、町のスルタンだった。スルタンは衛兵の部隊を持っており、妻も衛兵隊を持ち、また彼女は家の召使とすべてを持っていた。彼らは 30 年ほど後まで暮らし、もうひとりの娘と男の子を持った[...]。子供たちは、スルタンの子供らしく振舞った。

スルタンの妻の家族は金持ちだった。彼らは金持ちの家族として暮らしていたが、子供たちの叔父がひとりの女性と結婚するために出立した。その女性は幾らかの間滞在し、子供は大きくなり、叔父と仲がよかった。ところで、叔父の妻は貧しかった。彼らが滞在しているうちに、その金持ちの子供は大きくなり、立派に育ち、裕福で、仕事を得た。彼は、叔父の妻を奪って家を後にした。叔父はそれを知り、家族から離れた。叔父は、その子供がそのような振る舞いをやめて、自分の妻と戻ってくるよう最善を尽くしたが何も出来なかった。

彼らはこのように暮らしていたが、彼の父であるスルタンが、彼が結婚できるように、女性を探そうとした。しかし彼は断った。彼は自分で妻を捜しに行くことを望んだ。そうこうするうちに、この子供はひとりの娘を探しに行ったが、その娘は貧しかった。彼がこの貧しい女性を探し当てた時、父であるスルタンは、彼が貧しい娘と結婚するのを望まなかった。

そのように日々が過ぎ、父親は、自分が見つけた娘と結婚するよう言い続けたが、子供はその娘が好きではなかった。彼らは長い間議論し、子供は父に、今後は[親子で]別々に生活する、そして自分が一緒に暮らす女性は、自分が選んだ女性だ、と言った。そして彼は、貧しい娘と共に出て行った。彼らは出て行って、[彼は]この貧しい娘と結婚し、一緒に生活した。父親が自分の息子に、家族を養うために与えるはずだった金については、父親は彼に与えるのを認めなかった。この子供は彼の妻と共に長い間、貧困のうちに暮らした。彼は解決策を見つけられなかった。

そして、続いて[スルタンの]娘、長女である彼の姉が家を出た。彼女は働き始め、貧しい男を捜し当てた。そのことに父親は苛立った。

「自分は、金持ちでスルタンなのに、子供たちは貧しい人間としか結婚しない」。

父親は娘に意見して、その男と別れるように頼んだが、彼女は拒絶した。そこで、父親は町に法令を公布したが、それは、彼の子供のひとりにでも会った者は誰であろうと首を刎ねる、というものだった。町の人々は恐れた、というのも、スルタンの子供に話しかければ、スルタンがその人の首を刎ねるというのだから。男の子は貧しい娘と結婚し、女の子は貧しい男と結婚したのだ。

娘は、貧しい男と暮らしたままで、貧困にあえいでいた。そのうち、父親と母親が発作に見舞われた。男と姉は或る日会って、この[貧しさという]問題をどうすれば解決できるかを相談した。男は姉に、解決方法としては、自分たちの父親が引退すれば暮らしていけると言った。姉の方は、父親がこの地を離れて我々が暮らしていけると言うのは、まったくよい解決ではない、と言った。娘は言った。

「一番いいのは、私たちの叔父さんのところへ行って助言をもらうことでしょう」。

ところが男の子の方は答えた。

「僕が叔父さんにしたことすべてを考えると、助言をもらうなんてとんでもない。姉さんがひとりで行くのが一番いい」。

そこで或る日、娘は叔父のホディ・カリブに会いに出かけた。彼がそこにいたかって？ 勿論彼はそこにいた。娘は叔父に言った。

「叔父さん、申し訳ないのですが、私たちは厳しい状況にいます。私たちは生まれてからずっとスルタンの子供ですが、父は発作に襲われましたし、暮らしぶりは食べ物にありつけないほどです」。

そこで叔父が言った。

「それで、そうすれば解決するのかな？」。

娘は言った。

「私がここに来たのは、あなたに解決方法を見つけてもらうためです」。

叔父は彼女に言った。

「私は、お前の弟が私にした仕打ちを思うと会いたくもないし、彼のために解決方法を見つけるなど、話もしたくない」。

娘は家に戻った。それから弟に会いに行き、彼が許されざることをやってしまったために、叔父が解決方法を見つけれなかったことを伝えた。そこで弟は言った。

「それでは、お金を集めて分け、通りで何か商売を試みよう。多分、後で神が助けて下さるだろう」。

それぞれが自分の取り分を取り、娘は夫と、息子は妻と生活を始めた。このような次第で、彼らは日用品を買い、それを肩に担いで売り始めた。町の人々は驚いた。

「スルタンの子供たちが戻ってきて、オレンジやクレマンティーヌや日用品をこうやって売っているとは！」。

事実、それぞれが互いに負担をし合い、スルタンは彼らを見るに忍びなかった。スルタンは瘡を起こしさえした。

彼らはこのように過ごし、金をやりくりした。スルタンは彼の兵を遣わしたが、彼らにはこう言った。「わしの子供たちを連れて来て、この家で生活させるのだ。力づくでも連れて来て、拒んだら首を刎ねてしまえ」。

こうやってスルタンは子供たちを彼の家に連れて来るために兵隊を送った。しかし、子供たちは言った。

「私たちの父と一緒に暮らしたくありません」。

そして彼らは自分たちの住まいに戻った。

彼らはこうやって暮らしていたが、娘が持っていた金では生活を変えることは出来なかった。彼らは長い間、貧困のうちに暮らした。父親は相変わらず、子供たちが彼の家に戻って暮らすように、くどくどと説いた。そして最後には、娘は貧困をどうすることも出来ず、彼らは森で暮らすことにし、貧しさと覚束なさのうちに生活した。彼らには生きるためのものが何もなかった。そして男(彼女の夫)の方が、財産はなかったが教育を受けて知恵のある彼が彼女に言った。

「君は親元に戻る方がいい。君が僕を愛していて、お互いに愛し合っても、君が両親のところ

に帰れば状況は変わるだろう。

そして彼女は言った。

「私の両親はあなたが貧しいということで会いたくないのだから、[もし親元に戻れば]どうやったらあなたにまた会えるでしょう」。

「解決策がひとつある。一緒にいられるように暮らすし、同時に君は両親と暮らすようにするんだ」。

彼女は言った。

「どのような解決になるのでしょうか。というのも、あなたは名家の出でないといけないのにそうではないですし」。

男は言った。

「行って来なさい。僕がそのあとを引き受ける」。

彼女は実家に戻り父に言った。

「お父様、私のしたことを許してください。もう二度とすることはありません」。

父は言った。

「お前は私の娘だ。お前が望むものはすべてやろう。この家で暮らす方がいいし、もう私の対面を汚すことはしないでくれ」。

そうして娘は家に留まった。

しばらく経ってから、彼女の夫は寂しくなった。或る日、彼女は父親に、旅行に出ると告げた。彼女は外国に旅行すると告げた。彼女の父は金や他のものを彼女に与え、旅行の準備をした。娘は、男に会いに出かけ、彼に言った。

「父親がお金をくれたので、これで生活できるでしょう」。

ところで、彼女の出発前に、父親は男と会うことを禁じ、ヴァカンスに行ってから戻ってくるように言い、彼女の方は、男にはもう用はないし、二人の関係は終わったと言った。そして男の家で、彼女の父がくれた金があるので彼女は言った。

「今後は、まともに暮らしていけるでしょう」。

男の方も言った。

「これから何をしようか？」。

彼女は言った。

「私の叔父のところにもう一度行きましょう。そして、私の父親に、彼はスルタンだけれど私はあなた以外の男は望まない、と伝えに行ってもらおうと言いましょ」。

彼らは、娘の叔父のところに行ったが叔父は言った。

「私はそのような指図をすることが出来ないし、町のスルタンの前に厚かましくも出ようとも思わないし、このような話を彼に言おうとも思わない」。

娘はこの男と一緒に暮らす方法を見つけようとしたが、見つからなかった。彼らは金を使って店を始め、娘は彼女の父親であるスルタンの許には戻ろうとしなかった。そしてスルタンは、娘を待っていたが、娘は家に戻らなかった。

或る人たちスルタンに会いに行き、彼の娘が男と一緒にどこそこにいて、裕福で店を持っていて等々と知らせた。そこで父親は、自分の娘が男と別れるために自分が何を出来るかだろうと自問しつつ考えた。父親は兵を呼んで言った。

「そこへ行って、男を見つけたら首を刎ね、ここまで戻って来い。そうすれば彼女もこの家に戻るだろう」。

兵たちは、娘と男の居る町へ行き、男をあちこち探したが見つけられなかった。そして、誰かが、兵たちが男を探していることを知り、本人に伝えるために会いに行った。

「スルタンは、君の首を刎ねるために兵を送って来たから、町を離れるのがいい」。

男はそのことを娘に話した。娘は急いで弟を探しに住んでいるところまで行った。彼女は弟を見つけたが、彼は実家に戻らず。多くの難事を抱えていて貧しかった。彼は娘に言った。

「僕にはわからない。僕は今は、父の前に行くことすらしたくない」。

娘は弟に言った。

「こうなったら私が居るところまで来て一緒に住みましょう。父が多くの金と品をくれたので、これからはちゃんと暮らしていけます」。

そういうわけで、弟は彼の妻を姉のところまで連れて行った。彼らが着いた時に、兵たちも一緒に入ってきた。彼らは首を刎ねるよう命令された男を探した。彼らはその男を見つけることが出来なかったが、スルタンの息子を見つけた。彼らは尋ねた。

「さる男がここにいるはずなのですが」。

「いや、彼はいない」。

実際、スルタンの兵が男を探していると或る人が彼らに言いに来た時に、彼らは逃げていた。兵たちは朝からしばらく留まったが、男は戻ってこなかった。

彼らは町の外に逃げた。男は女に、今耐え忍んでいる難事を考えると、女の方は両親の家に行って暮らし、自分は別に暮らす方がいいと言った。しかし娘は断った。

こうやって彼らは、その森で3日、4日、5日と苦境の中で過ごした。そのうち男は、自分が知っている場所に行けばそこで暮らせると提案した。彼らはそこで身を落ち着けるために出発したが、相変わらず耐えられなかった。彼らは谷のあるところまで行った。そこで娘が言い出した。

「この谷から身を投げた方がいい。そうすれば二人とも安らかで純粹でいられる。両親の家には戻れないけど、私たちは愛し合っている」。

男は、それは解決にはならないと言った、しかし彼女は、それが解決する方法だと頼んだ。彼は、解決になるのは、彼女が家に戻ることの方だと言った。彼らはずっと他の解決方法を探したが、見つけることはなかった。

娘は、男に目を閉じるよう言い、彼らが目を閉じ、谷に飛び降りた時、神が奇跡を起こされ、谷の底に水が湧き出て、それが氷に変わった。今に至るまで、その水は残っており、人々が訪ねて見ることが出来る。

この話は、私がマダガスカルで聞いたもので、と言うのもそれはマダガスカルのアンティラベという村で起こったことだ。その水は今でもそこにある。訪ねて行けるし旅行者も訪れている。この話は残されているんだ。